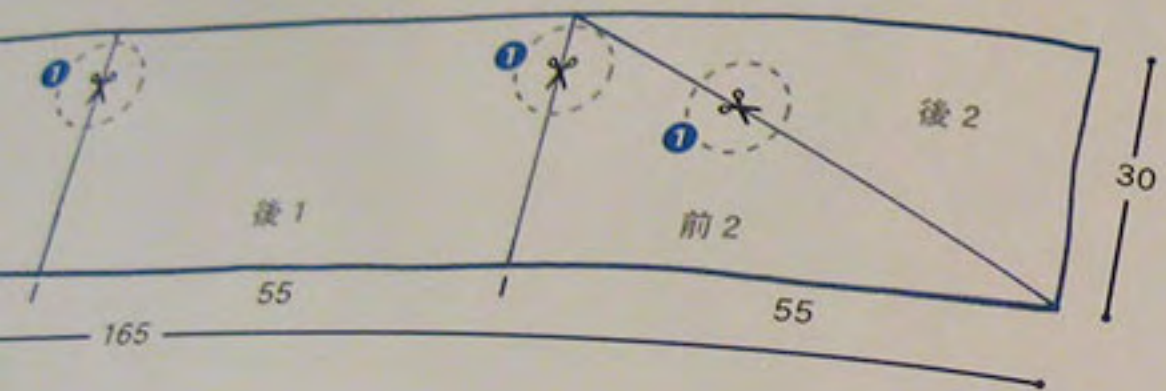


●必要な布 30cm × 165cm

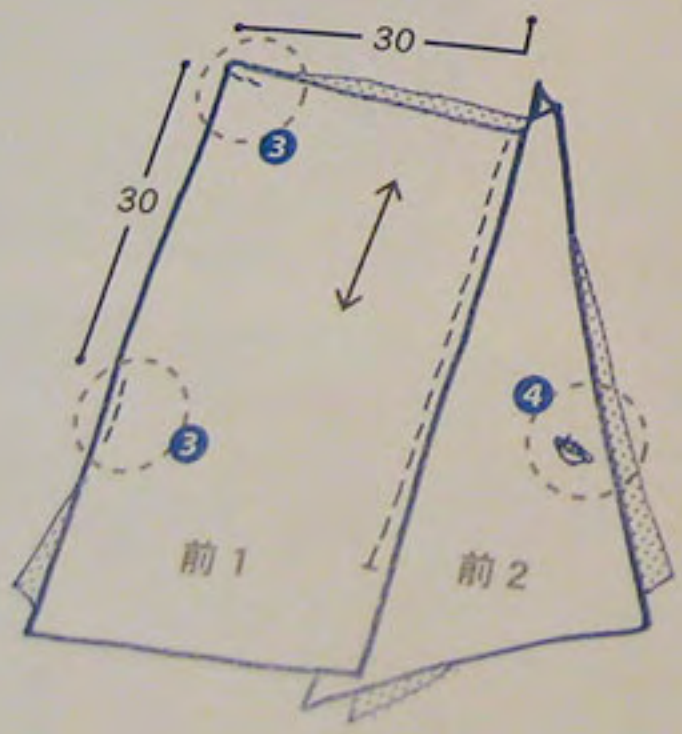
カットした三角の先を持ち出し肩にして
少し斜め使いのベストに
斜め使いがスマートに見せてくれます

の3枚に裁ち、そのうちの1枚を斜めに切ります。
は三つ折りで始末しておきます。



ます。

留めます。



服のかたちにする 3

キャミソール ポレロ
ブラウス ポンチョ
チュニック ジャケット



22 バルーンキャミソール P66



24 2段チュニック P70



26 マーガレットポレロ P74



28 ふた鼻ポンチョ P78



30 三角ジャケット P82



21 キャミソール P64



23 チュニックベスト P68



25 ゆったりブラウス P72



27 フード付きポンチョ P76



29 フレアージャケット P80



31 メンズジャケット P84

着物に代わるすばらしい熟年の服を

今でこそ和服を着るのは成人式か結婚式、はては何か改まった訪問服になってしまったが、私の若かった頃は、お勤め以外の女性は、夏を除いてたいてい和服であった。和服姿を美しいと眺めていたものである。

女は年とともに着こなしが上手になり、実にいきな装いになっていった。この着物にはこの帯を、この羽織を、と自分の好みを充分に生かす楽しみを持っていた。

ところがいつの間にか生活が変わってしまった。美しい着物姿に出会うということは、極めてまれになってしまった。成人式は言うに及ばず、結婚式では中年まで着せられた姿である。ひとりで着物が着れるのは六〇歳以上になってしまったのかと淋しくなる。

そんな私達にとって、老年の洋服はあまりにもあわれに見えて、方がない。この人に着物を着せたらどんなに品のいい熟年だろうに、

惜しいものだ、としきりに思う。

そんな時私は、空想でその人に着物を着せてみる。そして、今ある洋服姿とあまりにへだたりのあるのに悲しくなる。

時は流れて着物を着なくなったとすれば、それに代わる洋服があるべきなのに、世の中は若い人の服ばかりに目を向けて、中年以降の服はあまりつくりたがらない。

私がまだ織りをしていない頃、自分に似合う服のないのに困り果てどれだけ探し廻ったか知れない。しまいに、ないものとあきらめて、服地を探して縫うことにした。けれど仕立てに出せばバアである。やむなく自分で仕立てて着た。しかし自分で仕立てられるのは普段着だけ。

あーあ、一体どうなっているの、若い人のものだけつくればいいというの？ 色だけ年寄りくさくすれば済むと思っているの？と残念でならなかった。

振り返って、歴史のある西欧では、老人には老人の派手な明るい色の似合う服がある。けれど、なぜか日本ではその老年の服が受け入れられない。これは国民性とも言えようが、もう一つの理由は、日本には着物という美しいものがあるからであろう。どちらともつかないところに熟年の服の悩みがある、と私は思っている。

私は、美しい着物姿に代る日本の熟年の手織りの服を確立したいと思っている。熟年こそ、皺の中に深い味わいをたたえている、生きさまがにじみ出ている、それをいい既製品の服で間に合わせるのもつたいない。白髪の老紳士に匹敵する老婦人の服を、私はつくりたい。

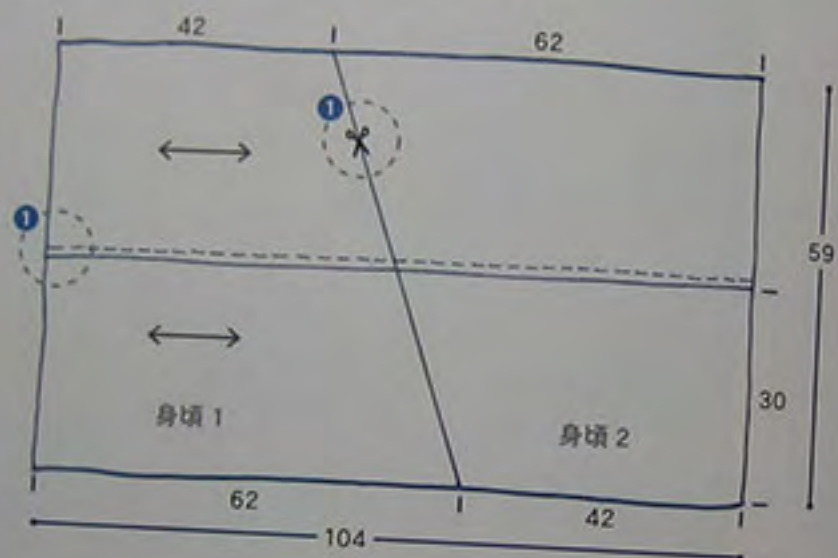




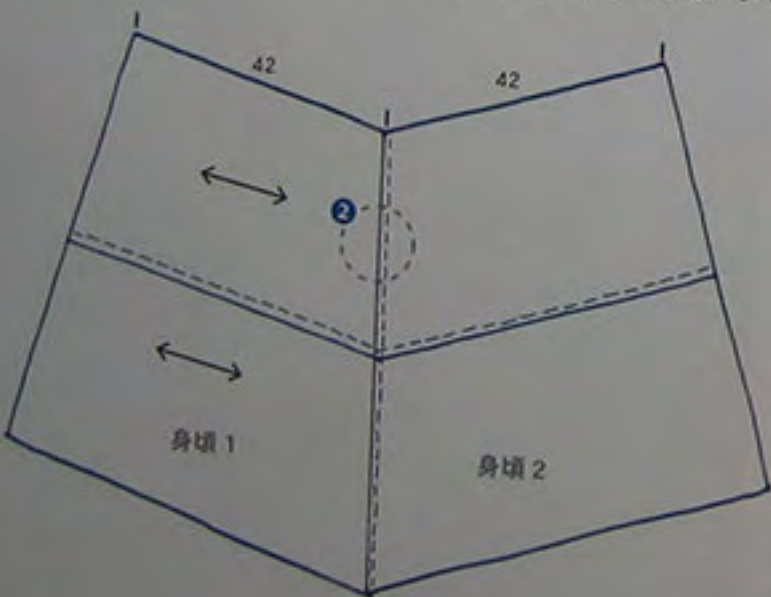
● 必要な布 30cm × 208cm

立ち衿がかっこいいベスト
少しAラインにふったことで
シャープな印象に

① 布を2枚（半分）に裁ち、縫い合わせます。



② 斜めに切った布は、巾の狭い方を上にして中心を縫います。



③ 肩巾40cmくらいになるよう布を折り、衿と肩を縫います。



④ 袖ぐりを開け、始末してできあがりです。

3 前開きベスト

